

# 夢ある都市 —元氣な各務原市—



岐阜県各務原市長 森 真

## 各務原市のまちづくりの方針

市では、平成13年に水と緑の回廊計画（緑の基本計画）、平成14年に都市計画マスタープラン、平成18年に景観計画を策定しました。また、平成22年には、社会情勢の変化やこれまでの取組みを踏まえ、都市計画マスタープランを改定しました。

### 都市計画マスタープラン

近年の社会経済情勢の変化を受け、私たちの生活スタイルは急激に変化してきました。急速な少子高齢化や、団塊世代の方々が定年退職を迎え、市内で過ごす余暇が増えることなどを考慮しますと、これからの都市に求められるのは、生活の豊かさを実感できる魅力あるまちづくりです。

私は人間が住むにふさわしい都市は、『公園都市（パークシティ）』であると考えています。それは地域特有の地勢を活かし、市内の水と緑を回廊として結び、生活の場・仕事の場である都市に、人生を潤す憩いの場や癒しの空間を創出し、都市と人と自然が共生する、先駆的な都市モデルです。

### 各務原市都市計画マスタープラン

Strategy and Policy of Kakamigahara City Planning



各務原市  
City of Kakamigahara  
2010

【都市計画マスタープラン】

このマスタープランでは、人口減少や厳しい財政状況などの、都市をとりまく大きな状況変化を想定し、従来の都市づくりの方向性を大きく転換しています。つまり、都市を構成する多様な都市

機能を適切に集約・連携すること、まちの歴史や伝統が生み出す、産業・まちなみ・自然など、地域固有の資源を再発見・活用しながら、魅力を高め、地域活力を維持・創出し、他のまちから移り住みたくくなるようなまちづくりを推進することなど、これからの都市政策の、進むべき新たな道筋を明らかにしています。

### 水と緑の回廊計画

本市の市街地は、北部に水源林としての里山が広がり、南部には流域の土地を豊かに育む木曾川が流れています。また、新境川や大安寺川などが田園や街なかを流れ、良好な風景を形成しています。『水と緑の回廊計画』は、こうした地勢と風土を活かし、まちの回廊・川の回廊・森の回廊という優れたランドデザインに基づき、「都市」が「水と緑」のネットワークにより調和する豊かな自然と共生できる美しい都市を創造するものです。

### KAKAMIGAHARA PARK SYSTEM 各務原市 水と緑の回廊計画



【パークシステム図】

この計画に基づき、「学びの森」、「各務野自然遺産の森」、「旗本徳山陣屋公園」など歴史や自然植生に配慮した公園を整備してきたほか、ボランティア数千人と協働した植樹祭なども開催

し、都市の緑化ネットワーク構築に努めています。



【学びの森】



【各務野自然遺産の森】

### 景観計画

美しい景観なくして、快適な生活環境はありません。市民が誇りに思い、また他都市の方々にも魅力的に思える都市づくりが今後さらに強く求められています。このような時代背景のもと、平成17年に国内6番目の景観行政団体になり、また、全国でも珍しい木曽川を跨いだ愛知県犬山市と景観協議会を設立しました。さらに、平成18年には、東海4県下で初となる景観計画を策定しました。



【木曽川景観協議会】

景観計画では、市内の景観特性や土地利用の現況を考慮し、4つの風景区域(森・川・田園と歴史・まち)に区分し、それぞれの区域の特

性を活かします。また、より積極的に良好な景観の形成を図るための「景観地区」、さらに、全体計画とは別に本市では、地区独自の景観計画を定める「重点風景地区」の候補地を選定し、地域住民とのワークショップによる合意形成後、その地区指定をしています。現在、2地区の「景観地区」、28地区の「重点風景地区」を指定するなど、周辺の景観と調和の取れた美しい都市づくりを推進しています。



【木曽川の景観】

これらの計画を軸に、景観や環境の向上など、都市の中の自然を創造していく取り組みは、平成17年「緑の都市賞」内閣総理大臣賞や、平成21年「住みよい都市づくり国際コンクール」銀賞世界第3位受賞、平成24年「まちづくり情報交流大賞」まちづくり効果賞など、国内外から優れた評価を獲得しました。

この中から、まちづくり効果賞に選定された中山道鵜沼宿でのまちづくりを紹介したいと思います。

## 歴史街道 中山道鵜沼宿の まちなみ再生

鵜沼宿は、中山道の69宿のうち西から18番目の宿であり江戸時代中山道の宿場町として賑わっていました。しかし、中山道の宿場町として栄えた鵜沼宿には当時の趣を残す建物も次第に少なくなり、市民の方々の記憶からも失われつつありました。本地区が有する歴史性は、本市にとって重要な歴史的遺産です。これからのまちづくりを推進するにあたり、これらが失われることがないように、景観的側面をはじめ、ハード・ソフト両面からの保全と再生をしてい

くことが必要であると考え、まちなみ再生に着手しました。



【鶴沼宿絵図（中山道分間延絵図）】出典：東京国立博物館

整備にあたっては、地域に住む方々のご意見を参考にして参りました。まちづくり・再生整備の方針に関して、広くワークショップを行ったり、地元の「まちづくりの会」の方々と約40回の意見交換会を行ったりし、地区の課題分析や、再生整備へのご提案をいただき、それらを生かして計画・整備しています。



【ワークショップ】



【まちづくりの会】

こうしたなか、『歴史街道である中山道鶴沼宿のまちなみ再生』を大目標に、歴史的文化遺産の活用による魅力・活気あふれるまちづくりを推進し、みんなが安心して楽しめる沿道空間の創出をしていくこととし、平成18年度から23年度までの6ヵ年計画で、まちづくり交付

金事業（現在の社会資本整備総合交付金・都市再生整備計画事業）を用いて、地区内の整備を進めてきました。

具体的には、往年の鶴沼宿を彷彿させるためのまちづくりとして、失われた脇本陣を当時の間取り絵図（鶴沼宿家並絵図）を基にランドマークとして復原整備、旧郵便局であった古民家を地域住民や来訪者の集う交流の場を提供するため「町屋館」として修復、現代的形態の公民館を地区にふさわしい外観で建替、当地区の方針に合う地区内住民が行う家屋等改修に助成を行う、等といった家なみ整備を行いました。



【復原された脇本陣】



【旧郵便局を修復整備した町屋館】

また、中山道である市道は歩道幅員が十分でなく、通過交通量も多いため、のんびりとまちなみを見て歩くには危険な状況でした。

そこで、歩行者（地域住民・来訪者等）の快適性の向上を図るため、道路美装化、せせらぎ水路の復元、無電柱化、案内板等の整備を行うなど、歩いて楽しい空間を創出しました。また車道を狭くし、同時に歩道を広げ、狭さく部をつくる等の工夫により自動車のスピード抑制策を行いました。これにより、一日平均12,000台ほどあった通過交通量は、整備完了後には一日平均4,000台ほどにまで減少し、歩行者が安心してまちなみ歩きができる道づくりを行い

ました。



【狭さく部を設けた中山道】

こうしたハード面の整備だけではなく、ソフト面での環境づくりも同時に取り組んできました。例えば、先述の景観計画、重点風景地区指定を行うことで、新たに作られる建築物・工作物に関し、形態・意匠・色彩などの基準等を設け、当地区にふさわしい建築物・工作物への誘導を行っています。

また、地元の方々で構成する「まちづくりの会」と連携して、宿場町の趣にあった、琴の演奏会やお茶会など様々な工夫を凝らしたイベントが行われております。その中では郷土菓子「がんどばぼち」を再現するなど、市の独自文化発信の機会にもなっており、活気あるまちづくりが進められています。また、「まちづくりの会」では、整備後の維持管理や、利活用についても検討を行っています。この他にも、来訪者をもてなす「ボランティアガイドの会」や、民俗文化を継承する「木遣保存会」など、多くのボランティア団体も発足しています。



【お茶会風景】

多くの方々のご尽力により、再生された家なみと一体となった歩行空間は往時を彷彿とさせるものとなりました。これらの整備全体を地域住民の方々との協働で行うことで、地域住民の

方々の地区への愛着が高まり、地域の絆づくりや賑わい創出へと繋がったと感じています。



【ボランティアガイド】

この一連の取組みは、ここで終わったものではなく、まち歩きツアーなどの実施により、来訪者層の拡大やリピーターの確保へ向けた取り組みが行われています。また、犬山市と歴史をキーワードとして「まちづくり盟約」を結び、国宝犬山城及び城下町と中山道鶉沼宿と連携し、新たな施策を展開していきます。

今後ともさらなるまちづくりを推進し、また全国に発信して、各務原市の「都市ブランド」確立の一助としていきます。



【まちづくり盟約締結】

## ■各務原市の土地区画整理事業

土地区画整理事業は、数ある都市整備手法の中でも、安全で快適な街づくりの最も有効かつ合理的な手法の一つであるといえます。本市において最も古い土地区画整理事業は、旧都市計画法時代の昭和16年から昭和32年にかけて行われ、その後多くの地区で健全な市街地整備に大きく寄与してきました。これまで21地区で土地区画整理事業が行われており、その総面積は約444.4ha、市街化区域面積のおよそ15%

が整備され、その約半数にあたる14地区が組合施行にて行われています。その内、鶉沼駅東部、鶉沼駅東部第二、新加納の各地区では、現在事業が実施中ですので、この3地区についてご紹介します。



【事業位置図】

鶉沼駅東部地区は、名鉄新鶉沼駅のすぐ東側に位置し、事業費約272百万円、減歩率39.4%（内公共減歩24.2%）、面積約2.23haの比較的小規模な地区です。平成20年の事業認可後、事業は円滑に進捗し、つい先日にも換地処分が行われ、まもなくその事業を終えようとしています。

駅まで非常に近いものの、名鉄・JR間の連絡軌道跡があり、かつては駅北・西側と分断されていました。この軌道跡を道路として整備し、また、名鉄・JR間の自由通路を整備することで、地区内外の連絡性を格段に向上させることが出来ました。



【鶉沼駅東部地区】

鶉沼駅東部第二地区は、JR鶉沼駅から東へ約700m、国道21号と木曾川に挟まれた、紡績工場跡地を中心に実施されており、事業費約1,460百万円、減歩率36.1%（公共減歩も同じ）、面積約12.75haの広大な地区です。平成22年に事業認可を行い、現在仮換地は済み、次第に

家々が立ち並びつつあります。

当地区からは犬山城が一望でき、また飛騨木曾川国定公園に隣接していることもあり、大変風光明媚な地区です。事業の実施にあわせ、先述しました景観計画の重点風景地区指定も行っています。今後は木曾川の景勝地として、緑豊かで美しい、住む人にも木曾川を訪れる人にも快適に感じられるまちづくりが期待されます。



【鶉沼駅東部第二地区】

新加納地区は、名鉄新加納駅から南へ約300m、機械部品の製造開発会社の工場を中心に実施され、事業費約505百万円、減歩率43.94%（内公共減歩20.68%）、面積約3.03haの地区です。平成22年に事業認可を行い、現在は換地設計や一部の区画道路整備を行っています。

これまで面的整備歴がないこと、地区のほぼ全体が埋蔵文化財の包蔵地であること、先述の工場の市外移転と平行して事業が進捗することも相まって、事業の進捗は容易とはいえません。しかしながら地元の機運は高く、事業の推進により健全な市街地が形成され、生活環境が向上し、地域の発展に寄与できるものと期待しています。



【新加納地区】